HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	当事者活動と相互的学習の分析：釧路市の事例から
Author(s)	武田, るい子
Citation	社会教育研究, 22, 37-59
Issue Date	2004-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28555
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P37-59.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

当事者活動と相互的学習の分析
～釧路市の事例から～

武　田　るい子

課　題　設　定

介護保険制度の施行に次いで，2003年度からは障害児(者)福祉の領域でも支援費制度が始まった。政策的対応が一歩進んだことで，誰もが人間らしく住み続けられる福祉コミュニティや共生社会のしくみづくりが課題として語られるだけではなく，住民主体の活動を含んだ地域資源の総合化を通じて具体化される時代に入っている。このようなボランティア社会にあって，再浮上している論点とは，現実社会には人々を生産的能力によって選別し疎外する社会構造があり，そこに内在する「支配･抑圧関係への抵抗を内包しない限り，(援助行為は) 欺瞞的」になるというものである[1]。

支配・抑圧関係への気づきを取り入れた学習実践の先駆けとしては，障害者の自立生活運動や女性運動が良く知られている。フェミニズムや障害者の自立生活運動の成果からは，意識覚醒プログラム（コンシャスネス・レイジング）や，援助関係を脱権力化するピアカウンセリングが生み出されてきた。これら自己意識の変革と他者関係の変容を学習の焦点とする教育プログラムに共通するのは，①個人的経験を重視し，社会を批判的に見ることを促進すること，②対等で平等な関係づくりを目指していること，③さまざまなアクティビティやロールプレイ等の活動を取り入れて，実体験と感覚を通じた学びを重視していることであろう[2]。

石川は自立生活運動が他者を巻き込む際の教育プログラムの実際を分析し，ピアカウンセリングの，現実生活を想定しながら体験的に学ぶ方法に込められた意識変革志向を読み取っている[3]。岡はより明示的に，「当事者が培いつつある文化を積極的に学習内容に組み入れ，当事者の外の世界に働きかけ共有していくことが社会教育に求められているのではないか」と社会教育の課題を提起している[4]。

しかし，「当事者が培いつつある文化」が新たな共同性生成の契機となるような学習に注目した研究は，プログラム化された学習内容と方法論及びそれらの評価に留まっているように思われる。石川は，自立生活を送る障害当事者と支援ボランティアの間に頻繁に起こりうる問題場面を再現して，新参者がロールプレイにより追体験的に学ぶプログラムの分析を行っている。それに対しては，他者を巻き込む際に生じる対立を当事者がいかに解決していくかという予備訓練的内容となっているという。従って，他者を巻き込む際の学習が当事者側の対処に還元されている点で，「内部処理」という限界を孕んでいるのではないかと考察している[5]。石川の批判のポイントはこうであろう。ピア

カウンセリングが当事者の他者関係対処能力の向上に効果を発揮することはあっても，それが自立生活支援のために不可欠な援助者派遣制度や政策の全体に影響を及ぼすことがないのではないか。自立生活運動の中核となる組織が自前で援助者を育成すること，それにかかる資金的負担に関して新たな措置が講じられるように制度要求の動きがないのならば，むしろ行政側からは歓迎される動きに留まってしまうという懸念であろう。

石川は政策要求運動と自立生活訓練を二項対立的に捉えて，ピアカウンセリングが後者の実践的取り組みであるとしているが，果たしてそうであろうか。そもそも制度的援助が限界を持っていた時代に(家庭奉仕員制度が若干用意されていただけ)，自前で支援者やボランティアを育成し，派遣するしくみを創ることによって必要を社会化し，後のホームヘルプ事業の先駆けともいうべき成果を生みだしたのであり，長い目で見ると決して「内部処理」として過小評価をすべきことではなかったはずである。また，多くのセルフヘルプ活動がそうであるように，ピアカウンセリングの学習的側面を学習内容からのみ評価すべきではなく，豊かな仲間関係がもたらす心理的効果として自己信頼が高まること，ソーシャルアクションに連続していく可能性の全体を視野にいれるべきなのである。自立生活第一世代が，社会的支援の少ない時代に自前で成し遂げてきた生活体験を振り返り，新参者に伝えていく際の実践過程では，伝え手自身の実際のエピソード（失敗や成功の逸話）が語られていたと思われる。誰にでも起こり得る物語として問題を共有化しようとする際の方法とは，概して語り手の社会的文脈を色濃く反映したものであったと推察するのが自然のように思われる。決して学習プログラムが単体で自立生活訓練なのではないということである。

本論は，学習プログラムを個人的，心理的効果からみるのではなく，むしろ，モデルとなる人との関係づくりや運動への十全なる参加を呼び込む媒介項と捉えていく。従って，新参者たちと活動中心者との間に，相互的な学びの文脈がいかに形成されていくのかを明らかにしていくとが重要であると考えている。事例として取り上げるのは，釧路市で知的障害児(者)の地域生活支援事業を総合的に展開している，「地域生活支援ネットワークサロン」(以下，「ネットワークサロン」) とその前身組織「マザーグースの会」である。両者は「知的障害児の母親」たちが中心となったNPO法人と自助グループである。そこに内在する学習の文脈は，従って母親たちの課題意識の変容を内実とするものである。二つの組織を取り上げるのは，セルフヘルプ活動から福祉事業を行うNPOが設立されたという経過と，地域福祉の環境条件整備を牽引している事実に着目してのことである。

学習を一義的目的としない福祉NPOの実践過程を学習論としてどう再構成するのか，仮説的枠組みは以下のとおりである。①まずは，活動中心者たちの当事者経験に内在している学びを総括してもらい，実践と課題意識の変容過程を明らかにする(振り返り，省察)。②実践過程で新規参入者たちを巻き込む際の学習をどう組織していったのか，学習プログラム創造過程と内容，成果を明らかにする(経験的知見，技術の伝達方法，正統的周辺参加のあり方)。その際に重要なことは，③参加者間の緩やかな連帯感であり，課題の意識化と普遍的に「意味のあるテーマの生成」と共有であ

る。一参加者から「当事者性をもつ支援者」になるということは，実践をつうじて問題意識が深まり，地域社会の現実的変化を主導する主体になりゆく過程である。本事例の分析からは，そのような自己教育主体形成の論理が見通せると同時に，いかにして実践共同体が広がりをもってきたのかを行為者の課題意識と実践過程の相互関連から見通せるものと考えている。

1章　自助的活動から社会的活動へ～「マザーグースの会」の足跡

「ネットワークサロン」は2000年4月に組織を立ち上げ，同年12月にNPO法人として認証された団体である。多くの市民活動団体がそうであるように，「ネットワークサロン」も法人格取得以前に母体となる任意団体「マザーグースの会」があり，そこから分離独立する形で誕生している。

表1　マザーグースの会の展開過程（時期区分）

	時　期	活動内容	通信に見る活動内容の変遷データ	特　徴
1	1993－1995	例会，通信，リトミック	(1～19)①発達の基礎知識，②生活上の問題提起，編集者の意見などを載せて共有，③子育て共同のためのイベント，仲間づくり，地域資源情報，④障害告知の際の問題を知る→告知アンケート，⑤会員の声→マザーグースの会の意味づけ	子育て問題に応える時期 会員間の学習活動中心
2	1995.4－1997	例会，通信，リトミック	(21)①障害者を排除する社会への疑問を提起，②今どき障害児の母親物語紹介，③学童保育調査結果(31)福祉情報冊子づくり	社会的偏見，母親の規範変化促す，社会資源情報共有 社会問題提起→地域調査
3	1998－2000.3	例会，通信，リトミック，スイミー 療育ガイドブック発行(1997.6－1998.9) 療育サロン(1999.6－2000.3)	①医療・保健・福祉専門職への課題提起（研修会，講演会）＝小児科医会主催「障害福祉研究会」開催，②M会の会則作成（助成金のため），③療育ガイドブック完売，増刷，④療育サロンの例会（多職種，多様な会の人），⑤マザーグースの会の総括，⑥ネットワークサロン設立する(45)，サロンは不特定多数の人の支援，M会は相互支援継続(48)	社会的関係づくり→専門職と顔の見える関係・協力得る，他会の人たちとの関係づくり 地域調査→地域活動の展開
4	2000.4－	例会，通信，リトミック，スイミー	**事務局員交代**，(52)兄弟の気持ちを聞く会開催（サロンとM会の連携例），(53)む－みん谷発足（LD, ADHD懇話会）	地域情報，編集者からの近況，メッセージ発信性高まる 会員間の活動中心

「マザーグースの会」は，1993年に主に知的障害をもつ子どもの母親が中心となって結成した自助グループである。定例的な活動をつうじて生活課題を共有し，「困難な子育てと向き合う覚悟」を支え合い，元気を充電する場を提供し続けている。主な活動は①月例会（自己体験の語り合い），②通信発行（年4回発行），③リトミック（当初月2回だったが，現在は月1回になっている），④講演会（1998年以降年1回程度開催），⑤余暇活動（観劇，コンサート，キャンプ等），⑥スイミー（月2回，老健施設のプールを借りている）である。特徴的な活動から展開過程を見ると，以下の4つの時期に区分することができると思われる。①子どもの療育や発達課題中心の話し合いから共有された疑問に対応した学習活動（月例会→リトミック）を継続してきた中から，②社会意識や制度の問題を発見，提起（通信での情報共有）していく時期を経て，③自分たちの住む自治体の医療・福祉資源情報を小冊子（『みんなのごきげん子育て』）として，編集発行する時期（地域調査）へと進んでいく。そして，④会員に限らず地域で子育て中の住民たちが交流する拠点（1999年度「療育サロン」開設）を創りだし，必要とする全ての人たちに医療・福祉情報を提供するなどコーディネートしていくことで，会員間の自助的活動から地域社会に向けた活動へと展開していったのである[6]。

会員間の活動から社会的活動へと展開していった契機には，会員と専門職たちが協同した「情報冊子の発行」と「療育サロン」開設があった。「療育サロン」は，「マザーグースの会」における地域交流拠点事業というべきものであった。中心的活動者たちが200万円の助成金を得て，母親の息抜きと子どもの遊び場を兼ねた「たまり場」を9ヶ月間常設したのである。その一貫で対象者を会員に限定せず，地域内のさまざまな障害児の親，行政職員，専門職などが参加する学習会「療育サロン」例会を7回開催した。主に地域の福祉事情や福祉制度についての講義と意見交換という内容であった。この学習会をつうじて，参加者間に地域の福祉資源の不足という問題が共有されていくことになったほか，従来障害別に組織され，関わりの薄かった様々な障害関係者たちのつながりを創るきっかけになった。このようにして共有されてきた課題の解決に向けて，交流・コーディネート事業部分を独自事業とする「ネットワークサロン」が設立されたのである。

「マザーグースの会」の諸活動は基本的には会員間の学習活動でありながら，共通課題の根本理解が深まるにつれて社会的活動部分が広がり，新たな事業体の誕生という社会的成果を生み出した。この展開を支えたのは会員の中から主体的に事務局の仕事を担い，問題解決に取り組む人材が輩出されたことによる。そうした人材輩出の契機に二つの異なる学習が位置づいていた。一つは，「マザーグースの会」の例会における「自己体験の語り合い」であり，もう一つは「療育サロン」の例会である。次章以下では，「マザーグースの会」の活動をつうじた中心的活動者たちの課題意識を明らかにして，二つの異なる学習の成果について考察をしていくことにする。

2章　実践者たちの課題意識の変容

1.「マザーグースの会」代表Aさん

Aさん：47歳，小児科医，子ども：女子17歳　普通高校3年生
障害：高機能自閉症

（※データは2003年4月時点）

(1) 療育：子育ての実感と抽象的専門知識の反省

小児科医として多忙な生活を送っていたAさんの二女は，2歳7ヶ月で専門医から「自閉傾向」という診断を受けた。小児科医でありながら，母親としてそうであってほしくないという気持ちが受診を遅らせることになったのだという。その後，娘の発達の遅れに気づかなかったことへの自責の念から退職を決め，2年間娘の療育に専念した。最初は働きかけに全く応えてもらえず落胆ばかりだったが，子どもの喜ぶことを発見して，根気強く働きかけたところ応答するようになっていった。やがてコミュニケーションが取れるようになり言葉もでたので，3歳の秋からは姉と同じ幼稚園に母子通園を開始，集団生活に慣らしていった。こうした関わりを経て，就学までにはおよそ1歳遅れの発達差にまで成長した[7]。

Aさんにとって，退職して専念した子育て経験は，これまで男性並に猛烈に働いてきた医師としての自分を相対化する機会となった。祖母に任せきりだった子育てを，自分の手でやり直し，母親としての自覚と役割を意識的に取り戻していく過程は，いわば男性が子育て参加で親役割を獲得していくことに近い状態であったという。

Aさんは，子育て経験が専門性の意味を変質させたことを，「(子育ての：筆者) 実感を得て，教科書的知識である専門知識の危うさを感じた。小児科医になりたての頃の乳幼児検診での，母親への指導に対する反省が生まれたのも事実」と語っている[8]。

普通の主婦としての日常については，「気心の知れたお母さんたちとたわいのないおしゃべりをしながら，そばで子どもを遊ばせる。一見，ごくあたりまえのようなそんな時間が，それまでの私にはなかったのです。そして，「○○ちゃん，またよくなったね」「もう心配いらないね」そんなことばにどれだけ励まされたことか…」と述べている[9]。普通のお母さんの経験からは日常生活の仲間関係という新しい世界，子育ての真の喜び，家族の結びなおしの意義を発見すると同時に，抽象的専門知識に基づく医療実践をしていた過去の仕事を反省する機会を得ることにつながったといえるだろう。対等平等な一人の母親という関係の結び方や，先輩ママや仲間の発見は，復職後の仕事と「マザーグースの会」の組織編成の原理に生かされていくことになったと思われる。

(2)　「マザーグースの会」からの発信－同じ立場をもつ医者として

復職後まもなくのこと，Aさんは後に「マザーグースの会」を共に立ち上げるBさんと出会う。療育機関に通わなかったAさんに，Bさんは同じ障害児の母親たちとの出会いを連れてきてくれることになる。発達の見通しや子育ての苦労，家庭の事情，社会的差別に至るまで，さまざまな話題について本音で語り合うことをつうじて「元気を充電する」母親仲間との出会いは，就学時期を迎えるときに「マザーグースの会」として公式な形へと発展することになり，Aさんが代表，Bさんが事務局担当となった。様々な活動のアイディアを発案するAさん，実務を担当するBさんと役割分担が自然と出来上がっていった。

初期の頃の活動は，例会，リトミックと通信発行だけであったが，例会での話し合いや通信発行時の発送作業は，自分たちの生活にまつわる体験談が詳細に語られる場となっていた。ある話題を受けて別の誰かが自分の体験を話し，意見交換することから浮かび上がってきた共通の課題について，通信をつうじて共有するという流れが自然と出来上がる。結果的に，母親たちが語る不平不満は単なる文句ではなく，改善されるべき課題であり，自分の問題は社会の問題でもあると気づかせ，協同で解決していくことができるという動きをつくりだしていくことになった。リトミックやスイミーはまさに，そのような自前の学習活動であり，母子の外出機会であった。また，通信では専門医の発達についての論文やエッセイを連載するなど，定例活動に参加できない会員にも必要と思われる情報を提供することで，会員間の共通課題に応える活動を展開し，共感者を広げていった[10]。

療育機関に子どもを通わせた母親たちの当時の話題を受けて，Aさんは一医療者として，利用者と提供者の視点の違いに気づかされたという。子どもの発達を導くためには，子どもの個別性を基本に据えた療育支援の方法が確立されるべきであると同時に，母親の心に対する配慮が必要である。しかし，現行システムは援助者側や制度の都合が優先されるものであり，利用者のニーズを真に捉えていないと気づかされたのであった。そこでAさんは会員に「障害告知時の医療者の態度に関する」アンケート調査を実施（1994年12月から1995年2月），1996年にはその結果を釧路小児科医会で，「障害児家庭における早期介入の試み」と題して発表している。現行の障害児の療育システムの課題を提起したつもりであったが，当時はほとんど関心を示してもらえなかった。医療専門職に当事者の視点を知ってもらいたいというAさんの思いは，二女が生まれる前の自分自身の反省を踏まえての実感であり，福祉と医療の連携に加えて当事者との連携が課題とされる現代の先取り認識であったが，時期尚早だったと当時を振り返っている[11]。このことはいったん，専門家の権威失墜をもたらすものとして退けられた感があったが，1998年2月には正式に小児科医会主催の「障害福祉研修会」で障害児療育システムという分科会テーマに汲み上げられていった。

Aさんはこの頃の通信（33号）で，「何かが少しずつ「ノーマライゼーション」に向けて変わっていく」のを確実に感じると述べている。「マザーグースの会」の活動が社会問題の提起へと広がりをもち始めたのは，このように共通する問題を実践課題として認識したリーダーが，学習会や調査活

動に取り組んだことに始まるといえよう。

(3) 療育観をめぐる問い－療育とは普通の子育ての一部

社会に対して問題提起をしただけで解決が図れるものではない。Aさんは，自分の専門性からどのような発達支援が目指されなければならないのかを考えていた。障害観や発達観についてはいくつかの異なる考え方がある。Aさんは '障害受容＝社会が丸ごと障害者を引き受ける' という理想主義に傾いていくことには疑問を呈する。子どもはどの子も育つ力を持っており，障害児であっても発達の限界があっても「育つという事実」に着目し，その子が育つ力を伸ばしてあげる自覚的な働きかけが必要だと考えてきたからだ。障害の事実を受け入れるとは，何もしないこととは同意でない。正常化する教育を否定するあまり「丸ごと受容の論理」が，吟味されぬままに流布していくことを危惧するのである[12]。

「発達障害の子どもの親に子どもの障害の意味を理解させ，来るべき将来の予想をたててあげることはとても重要なことです。でも，それと同時に，親が子どもの成長を願い子どもの幸福を願う気持ちに寄り添うこともまた，とても大事です。それは「障害を受容」するしないの問題ではないのです。…子どもをありのままに愛し，はぐくむための具体的な手立てを示すことです」。このように考えるAさんは，まず「育つ力」に働きかける努力をいかに支援するかが自分の課題であると確信していった。

「…本来こういう子どもの療育は施設で行うものというより，毎日毎日の日常の中で繰り返される子育ての延長なのではないかと，私は今になって思うのです。つまり，朝起きて，今日は何を食べようか，どこに遊びに行こうか…そういうことの繰り返しの中で，少しでも子どもの笑顔が見られるように工夫し，この人と一緒にいると楽しいと思ってもらうこと。…古めかしいやり方のようですが，結局そういうことを子どもの発達に沿って丁寧に積み上げていくしかないのではないでしょうか」[13]。

目指すべき支援のあり方とは，母親と子どもの日常生活に即して，発達をいかに観察し，働きかけると良い反応をするのかを，母親自身が発見していく過程に見通しを与えていくような支援の方法ということである。母親が子どもと向き合うことを自らの課題とすることで，自分の生きられた世界における変化を主導する力を高めていくことを重視するAさんの立場は，1998年頃に明確なものになっていった。

(4) 「マザーグースの会」とは何だったのか

『療育ガイドブック』は約5000部を売上げ，全国の療育関係者，親から大きな反響があったほか，他地域でも同様のガイドブックが作成されるなどの影響を与えた。同時開催された高松鶴吉氏による出版記念講演会は，会員たちや専門職（保育園職員，看護師等）たちがボランティアとして裏方を支え，大成功の内に幕を閉じた。また，社会的反響がマスコミに注目されたことで地域での社会的認知が高まっていくことになった。それまでの，「マザーグースの会」は必ずしも地域の療育，行

政関係者から好意的に受け止められていなかったと，Aさんは振り返る。しかし，この協働の経験から広がった社会関係を活かして，次の社会的活動を展開したいと考えていった。そして社会福祉・医療事業団に助成金を申請，1999年6月には，事務所を借りてBさん，Cさんが常駐する「療育サロン」を2000年3月まで開設した[14]。

2000年3月には社会的活動部分をNPOとして分離させるか，「マザーグースの会」として継承していくかの話し合いがもたれた。このような動きの中で活動者たちは，「マザーグースの会とは何か」を考えざるを得なくなった。自分たちはいったいこれまで何をしてきたのだろう，私たちの願いは何だったのだろうかという問いは，Aさんの総括によれば「私たちは，自分の人生を自らの手でデザインし，主体的に生きていきたいと考えるようになりました。…自ら選び取って「実感しつつ生きる」ということ」であるという答えを導いている。「「マザーグースの会」はみんなで一緒に何かをするというより，そこでそれぞれが自分の思いを実現するための，つまり自分自身で歩き始めた一人一人を応援するための母艦のようなものではないかと最近私は思っています」[15]。これからは，「障害をもった子どもと親たちがここにこうして元気で暮らしているということを，多くの人たちに知ってもらいたいと思っています。そのことが，若い親たちを応援し，私たちの子どもたちが本当に安心して暮らしていける地域をつくっていくことになると信じているからです」[16]。「親支援・子育て支援」が課題となったのは，障害児を育てて広がる人間関係や「支え合う力」を感じてきたからこそであった。同様の課題を抱える人たちに，「障害のあるわが子と暮らしていて幸せだと感じている」ことを知らせることが，一番のメッセージであると中心的活動者たちは考えたのである。

(5)　地域の課題に取り組む－自己実現と社会変革

仲間であるBさん，CさんがNPOを立ち上げ独立していったことで，Aさんは当事者性に立脚した専門職としての自分の役割を強く意識していくこととなった。他の地域で子どもの育ちを応援する療育関係者との出会いをきっかけに，障害児を育てる当事者の自覚を新たにしている。「私たちもただ「当事者だから」「親だから」という立場に甘えることなく，きちんとその役割を認識し，「子どもを育てる」と同時に地域づくりの担い手としての「自分を育てて」いかなければ，という思いも強くしています」（通信42号）。

Aさんは，子どもたちが生きていける社会を築くためには，親たちだけではなく，子どもと関わる全ての人や，行政ともつながっていくこと，「地域連携」，「ネットワーク」を「誰かが本気になって風穴をあけていく」ことが必要であるという。NPOはそのために，地域の福祉資源と関係資源づくりという目標を掲げて結成されたのである。

さて，自分の役割は何なのかという自問の末に，Aさんは2001年5月に，地域で唯一の発達診療外来をもつ小児科クリニックを開業した。医療が療育の初期に果たすべき役割の大きさに気づき，療育期の母子の支援をどう進めるべきかを熟考してきた末の結論である。障害をもつ子と暮らしてきた経験と「マザーグースの会」の実践的知見とが，小児科医の仕事へと流れ込んで新たな専門性

をもつ自己へと統合されていったのだといえる。

「大切なことは，子どもに障害があろうとなかろうと，子どもの状況をしっかりと認識し，子どもと真正面から向き合って自分らしい子育てをすることだと思う。そういう親子を支えるために「専門家」は存在しなければならない」[17]。

その後，地域では障害関係者，子ども関係の領域横断的な研究会，ネットワークが設立されている。2001年度以降は，LD・ADHD等軽度発達障害関係者の懇話会，児童虐待防止協会釧路支部が設立され，両方の事務局を「ネットワークサロン」のCさんが担っている。マザーグースの会は，2000年度から運営担当者が入れ替わったものの，これまでの人と人が語り合い，「元気になる場」の提供という原点活動を継続している。そこに織りなされている人間関係と活動の実態には，十全な参加者たちのこれまでとは異なる課題認識や個性が色濃く反映されている。

2．「ネットワークサロン」の代表理事Bさん

Bさん：47歳，保育専門学校卒，保育士としての職歴あり
子ども：男子16歳　高等養護学校2年生　障害：知的発達遅滞（ADLは自立）

(1)　療育：「障害児の母親」という体験

Bさんの長男は6ヶ月検診で寝返りが打てなかったため，7ヶ月目からは肢体不自由児の通園施設（整肢園）に母子通園を開始した。「長女の時と同じように育てているだけでは駄目なんだ」という思いを漠然ともったが，「障害児であるという自覚とか，すごいショックということは全くなかった」。そのころは「まずは寝返りがうてるようになり，ハイハイして歩けるようになってくれればいい」と考えていた。専門医を受診しても全体的な発達遅滞ということで，原因は特定されなかったからだ。

障害児であるとの実感を持ったのは3歳近くにもなって歩かないことからだった。Bさんは親戚に障害者がいるが，親たちの誰もが偏見をもって接していたという記憶はない。過去の生育史の中に埋め込まれていた障害者との出会いには，社会的に差別され，かわいそうだとされる人たちというイメージがなかったのだという。確かに子育ては大変だが，だからといって，身近な人に子どもの存在を否定されたことはなかった。

このような来歴をもつBさんにとって専門療育施設での経験は，自分の素朴な障害者観との葛藤を生み出していくものとなった。リハビリテーション至上の療育施設で，母親は専門家から訓練方法を学び，家でも実施するよう指導される立場になる。専門的な方法を指導される重圧感に，「子どもが泣くのに，そこまでしなきゃいけないのかしら」と思い，「なんで自分の子にこういう訓練をしなきゃいけないのか，納得できるように説明してほしいと，先生方とは本気で渡り合った」という。

Bさんの療育経験は「今頑張らないと将来歩けなくなるよ」と不安を煽られ，訓練に駆り立てられ，障害児と自分を否定される経験であったのだという。

ここに在籍中の4年間，BさんはPTAの副会長と会長を歴任している。誰もなり手がいないからという消極的理由で引き受けたが，母親新聞を作って親の思いも語り合ったことで，療育中心の生活の中で充実感を感じる経験をしている。しかし，この経験はやがて療育施設での母親同士の対話の限界と，行政組織内部の壁を自覚させられることになっていく。母親の打ち合わせには職員が同席し，赤裸々な気持ちを語れなくなっていった。共に関わってくれる職員もいたが，結局思い通りにはならない組織の枠があることを実感したという[18]。

(2)　「マザーグースの会」における学び：体験の対象化

療育施設で自分なりに組織への働きかけをしていた頃，BさんはAさんと知り合う。1991年から1993年まで続けられた月1回の茶話会では，療育施設の中では語れない本音を語り合うことができるという経験をする。組織内部の改善以上に，自分たちで自分たちの問題を語り合い，学習する機会を創り上げることに期待する気持ちが高まっていくことになる。このように，「マザーグースの会」立ち上げの前段には，療育施設内部での改善の働きかけに対する限界が自覚されていた一方，自分なりに何かに取り組んだことの自信や力は，「マザーグースの会」となってから，代表のAさんが発信する斬新なメッセージや新しい活動の発想を，地道に支え形にする事務局の役割を担うことで生かされていくことになったのである。

1994年から1995年頃，Bさんは通信に自分の子育て体験エッセイを数回載せている。書くという行為は，悩んできた自分の過去の子育てを対象化して，若い母親たちに同じ気持ちでいることを伝え，少し先を行く子どもの発達見通しを示すことになる。また，他者に伝える作業をつうじて，対象化されるのは困難な子育てを何とかやり抜いてきた自分自身への自信であり，自前子育ての承認である。若い親たちが現に直面して悩んでいる姿を客観的に見つめながら，過去の自分を見つめる作業をすることで，経験の中にあった療育への疑問が何に対する疑問であったのかが明らかになるということだ[19]。

エッセイ「たたかなくなった自分」においてBさんは，療育の真っ只中でいつもがんばる母親でいることを求められ，自分の好きなことをしてはいけないような療育機関の雰囲気と人間関係にストレスを感じ，ちょっとしたことで子どもをたたいていた自分を率直に告白している（1994年「マザーグース便り」No. 13）。そして今，自分は子どもをたたかなくなっているのは何故なのか。自分の得意なこと，好きなこと中心に子どもと関わっているからだと自答する一文がある。「子どもが笑顔でいればそれで良しとすること，子どもよりも親が大事のときがあってもいいとすること」，この結論に表現されているのは自前の子育て観である。過去の子育てを反省的に振り返る作業の中から自分なりの対処の仕方を発見，承認していく過程が見て取れる。Bさんは療育時期における「障害児の母親」として期待される役割との対峙を経て，なぜ子育てがつらかったのかを考え，社会関係

を調整する力をつけて自己実現を果たしてきたのであった。

(3) 療育サロンの試行：母親支援という課題

「マザーグースの会」での実践と子育ての振り返りを経て，Bさんの母親支援という課題意識は，「療育サロン」において「親子サロン」（子どもの遊び場提供）の試行へとつながっていく。障害児の母親は子ども中心に生活を送ることが当然であり，子育ての指導（療育）を受ける毎日の中で，いつも焦燥感と罪悪感に苛まされるとBさんはいう。それは，良いといわれることはすべてやり，少しでも普通に近づけるようにと子どもを叱咤激励する母親が「良い母親」とされることからくる重圧感が，むしろ子育てを苦しいものへと転化させることになるからである。このような自己の体験を対象化して批判する意識が，同様の課題を抱える若い母親たちを共感のまなざしで支える仕事を形作っていくことになった。「ただ，母親の気持ちが楽になってもらえれば…」というまなざしと共感を基本的な原理として，母子の遊びの広場として「親子サロン」が併設され，現在のNPOによる「親子の家」事業へと継続している。

3．「ネットワークサロン」の事務局代表Cさん

Cさん：33歳，大学卒，職歴はなし
子ども：女子11歳，養護学校小学部6年生　障害：レット症候群（重症心身障害）

(1) 療育：「障害児の母親世界」への疑問

Cさんの場合，長女の発達の遅れが明らかになったのは1歳半検診の時であった。他の子どもとの違いについては，それも個性であると受け止めていたため深刻に悩むことはなかったが，専門医受診をしても発達障害の原因がわからず，関わり方の問題ではないかと指摘されて傷つく経験をしている。その後，別の児童精神科医から，育て方と発達の遅れの因果関係は薄いという言質を得て，自分の子育てに自信を回復し，子どものありのままを受け入れ育てていく覚悟が固まったという。その後，3歳頃にレット症候群の疑いを指摘され，全国組織主催のサマーキャンプでの専門医受診により，ようやく病名が判明，障害の原因が明らかになった。

1994年春には「マザーグースの会」の活動が新聞に掲載され，例会に参加している。どのような発達の遅れがあっても「娘は娘，そのままでとても魅力的だ」とありのままを肯定していたCさんにとって，「マザーグースの会」の例会は，いわゆる普通の「障害児の母親」世界―涙ながらに子育ての困難を訴える人たち―との出会いとなった。あまりの受け止め方の違いに違和感を覚えながらも，他者の話を聞いて「何故，障害児の子育てがそれほど辛いこととされるのか？」ということを考えるようになった。しかし当時は，自分が療育施設に母子通園をしていたこともあり，例会にもあまり参加しない一会員であった。Aさんが実施した専門家の告知のあり方や態度に関するアン

ケート調査は，Cさんの専門医受診の経験談から発案されたことだった。

Bさんと同様にCさんも療育施設に通う母親たちが，「障害児の母親」という役割を学んでいく姿に違和感を覚えていたという。乳幼児期には障害を軽減するようできるかぎりの訓練を受け，それを自宅でも実行し，献身的な介助者であることを社会的に要求される母親，自分のために楽しみをもつことも，子どもを預けて働くことも，遊びにいくこともできないのが多くの母親の実像である。「自分は，自分の人生と子どもの人生は別物」と思っていたにもかかわらず，「不幸な母親」とか「かわいそうな子ども」というステレオタイプな反応に出会うたびに，「違うのに…」という思いにかられたという。

「マザーグースの会」はそうした押し付けられた規範，イメージへの疑問が語られる場である。対置されたのが「自分の人生の主人公になること」，「親が元気なら子どもも元気」という自己肯定的スローガンである。本音で自分の子育てや人生を語り合うことを通じて，困難な子育てや生活に向き合うポジティブな力を分かち合っていく。そこから人とつながることの良さを実感し，「障害児をもってラッキーだった」とCさんは語る。「障害児をもったから，この世界に踏み入れたからこそ気づくことができた，たくさんのいいことがあるのもまた事実です。当事者にならなかったら，私はこうした思いに気づくことはなかっただろうし，多分，今感じているような豊かさを感じることはできなかったと思います。そしてたくさんの仲間にも出会うことはなかったし，さまざまに生き難さを抱えているたくさんの人たちのことも意識できずに，他人事になっていただろうと思うのです」。障害児と暮らすことで拓かれてきた意識と，他者とのかかわりで豊かになっていく関係を，地域社会の中に広げていくことが必要であると考えるようになったのだという。

子どもが障害をもっていようといまいと子どもであることに変わりはないと，堂々と言える社会ではないことが問題である。能力で人間的価値を序列化し，差別していく社会のありようが障害をもつ人たちとその家族の生きづらさを作っているのだとすれば，それを超えるのはどうしたら可能なのか，障害者を特別の人たちとみることはできない。Cさんは障害児が生まれたことで，自分自身も能力主義の価値基準の下，学業成績と出身校という指標で価値を計られながら生きてきたことに気づかされたと，社会的矛盾の本質を指摘している[20]。

(2)　「マザーグースの会」への実践的参加

Cさんは療育時期から，通信の編集発行担当，療育施設でのPTA活動，交流保育の実施など地域社会との接点を常に模索し続けてきた。そうした意識的行動の積み重ねが，1998年，地域の医療・福祉情報をまとめた小冊子『療育ガイドブック：みんなのごきげん子育て』の編集発行，1999年の「療育サロン」開設責任者へとCさんをステップアップさせ，「マザーグースの会」の活動を社会に拓いていくことになる。

『療育ガイドブック』編纂のいきさつは，通信編集作業中の「ところで，釧路市に施設ってどのくらいあるのか知らないよね」という会話に端を発している。「それなら自分たちの手で調べてみよ

う」ということになり，会員である保健師や医療関係者に相談して情報を集め，編集委員会を立ち上げて本格的に取り組むことになったのである。これまでのAさん中心の活動は子どもの発達，療育相談と学習会，会員調査を主な内容としていたが，Cさんの実践参加は「マザーグースの会」の活動を，一気に地域活動のステージに押し出すことになった。まず，冊子の内容を子育て中の親の視点に立って編集することが確認され，福祉資源情報そのものと子育て中の悩み相談，事例を盛り込むことが決まった。事例の執筆は「マザーグースの会」会員が自分の体験を書いている。アイディアが形をなしてきたところで，Aさんが企画書を作成して行政から印刷代の助成を獲得，地域調査に基づく冊子づくりは，地域の関係者ネットワークづくりという思いがけない成果もたらしたのである[21]。

1998年に長女が養護学校へ入学，この頃からCさんは自分自身の仕事と生き方を考え始めた。およそ一年がかりで取り組んだ『療育ガイドブック』の仕事が終了した直後に，市内で開催された「心に刻むアウシュビッツ展」の実行委員会にボランティアで参加した。そこで，ボランティア・コーディネートの仕事を任され，自分の力を発揮できる社会的活動にのめりこんでいったという。報告書に寄せられた感想や意見を読んでCさんは，「多くの人たちがナチスの虐殺を他人事のように見ていると気づいた」という。「自分の生きている時代，社会との共通性をみることなく過去のこととしている。自分は娘が人間として自由に生きていける場がないことをリアルにわかってきた頃だったので，アウシュビッツの問題性を自分の生きる社会の問題と引き写して見ていたのだと思う」。このボランティア体験が「療育サロン」開設前の自分に最も影響を与えたできごとであったのだという[22]。

(3)　「療育サロン」の運営～地域福祉の拠点づくりという課題

「療育サロン」の開設はあくまでも「マザーグースの会」の一事業であったが，より広い参加者層を掘り起し，地域の関係者ネットワーキングを目的として，意識的な学習会が開催された点で大きな違いがある。また，事務所をもったことで多様な人が尋ねてくれるようになり，後に「ネットワークサロン」を共に立ち上げるBさんとは，「療育サロン」で共に働く中で急速に親しくなっていった。また，後に「ネットワークサロン」に転職するH氏（1999年当時は市役所のケースワーカーであったが，2001年にサロンへ）も，この頃「療育サロン」に頻繁に出入りをした一人であった。

1999年6月，市内の幼稚園の空き教室を借りて，ホームページを立ち上げることから始まった「療育サロン」は，新聞でも取り上げられたことから徐々に人が立ち寄って行く場所になっていった。特に，秋になってからは外遊びができなくなったこともあり，幼稚園の遊具を使った「親子サロン」に大勢の親子が立ち寄るようになっていった。週2回，午前中のみの開放だったが，その反響の大きさからは，児童館にも通いづらく遊び場のない乳幼児期の障害児の課題は明らかであった。当たり前の地域生活を実現するためには，具体的に使える支援の手立てがないという事実を当事者間で共有し，どのような支援が地域に必要か「夢」を語ることが必要であった[23]。

Cさんが社会的行動をするのは，乳幼児期の障害児をもつ母親たちとの出会いの中で感じてきた違和感－療育施設で多くの親たちが障害児の出生をショックだったと語っているのを聞いて驚いた－からである。それは「親が劣等感を持たされて，引け目を抱えさせられており，福祉制度や専門機関のサービスに満足できないにもかかわらず，規格に合わない自分たちが悪い，文句はいっちゃいけないのだと思ってきた」ことの裏返しであった。また，言ったところで何も変わらないというあきらめがあった。そうした当事者意識が地域福祉や共生社会を創る阻害要因となっているのだとすれば，そうではなく，不満は公言していいということ，自分の望むサービスは声をあげれば創れるのだということ，そうすれば何とかなるのだという動きを作り出したかったのだという[24]。当事者たちは個人的体験として福祉制度の壁や不便さを実感していたのだが，これまでは，その事実が多くの人に共有されることがなかったのである。こうして，在宅支援や地域生活を送る上での支援の必要が潜在化していたと考えられる。そのことを確認するためにも障害者の人たちの生活実態や，福祉サービスの現状を知ることが不可欠であるとの判断から，「療育サロン」の学習はケースワーカーH氏による講義とワークショップ形式で，地域の福祉事情を学ぶことから始められることになった[25]。

3章　考察

1．課題意識の差異とアイデンティティの形成

これまで見てきたように，「マザーグースの会」の活動はAさん，Bさんという同年代の障害をもつ子の母親二人によって牽引されて，乳幼児期の子育て課題に対応する学習活動を展開してきた自助グループである。表2に示したように，実践の経過を見ていくと三者の実践への関わりかたが徐々に変化し，相互に得意な領域や会における役割が分化していくのが読み取れる。三人のリーダーたちは同一の活動に携わっていながら，課題意識に違いのあることが明らかである。

Aさんは医師として自分の専門性を生かした役割を常に果たしてきた。初期の頃には，当事者でもある小児科医として発達の相談に応じ，専門性を発揮する場面が多かったという。初期の頃に例会に参加していた会員たちは，例会には発達相談を目的に参加する親たちが多くいたこと，ただ親たちは専門家であるAさんのいうことを鵜呑みにするというのではなく，あくまでも問題提起と受け止めて，例会後に喫茶店に行って自分たちなりに理解を深め，良く話し合っていたことを振り返って，「まるで素人の子育て研究会のようだった」と語っている[26]。

Aさん自身は例会を次のように振り返っている。「話題はその時々の社会問題から，嫁姑のこと，夫のこと，病気のこと，学校のことと何でもある。でも，障害児の問題を考えながら，人間の生き方を考えていくことに繋がっていくことが多かった。人間ってなんで一緒に暮らしているのだろうってふうに(略)。他者の意見を参考にしたり，自分の意見を言ったりしていると，あまり意味の

表2　実践経過と三者の関わり方及びアイデンティティの形成

年	A	B	C
1987	K病院勤務	長男の障害告知，療育開始	
1988	療育のため退職，専門医の助言を受けて自宅で子育て専念	母子通園施設での疑問，不満	
1989	幼稚園母子通園（秋）		大学（札幌）
1990	幼稚園単独通園(春)，勤務医(老人病院）に復職		
1991	Bさん他障害児の母親たちとの出会い，専門医の助言もなく，訓練に専念する人達の現実を知る	Aさんとの出会い，療育への疑問，子育ての不安などを話し合う。親の本音を理解してもらえる専門家との出会いで心が解放され，自分のことも考えられるようになる	
1992	月1回の茶話会を継続する		釧路に戻る。長女出産
1993	「マザーグースの会」設立(3月)	「マザーグースの会」設立，事務局担当。新しい会員増加していく。例会で他者の経験を聞く機会が増え，自分の経験を語ることで自分の子育てを対象化，問題が見えてくる	1歳半検診で障害の疑いあり専門医受診で傷つく体験をする
1994	北海道新聞にて子育て体験記連載	通信で自分の子育て体験をつづるようになる。先輩として後輩ママにエールをおくることで自己確認をしていく	新聞をみて「マザーグースの会」参加。例会で障害告知の問題について発言
1995	障害告知における医療者の態度アンケート実施		「マザーグースの会」事務局へ参加(通信づくりなど)
	当事者性をもつ専門職	先輩ママ，相談役	事務局，活動推進役
1996	釧路小児医会で「マザーグースの会」の実践を発表する		地域の幼稚園で交流開始
1997	療育ガイドブック	療育ガイドブック	療育ガイドブック(中心的役割)
1998	釧路小児科医会で障害者福祉研修会開催(療育システムづくり，当事者視点の提案）療育ガイドブック完成，記念講演会開催		長女養護学校入学，交流教育(新聞記事)
	地域療育システムの模索	相談・情報発信の拠点づくりの試行（福祉事業の準備期）	
1999	療育サロンでの発達相談，助言（専門家役割），他地域との交流，療育再考セミナー指定発表，療育システムづくり模索	療育サロン～「親子サロン」実践	療育サロン～事業ノウハウ，ニーズ把握，ネットワークづくり社会福祉士通信講座受講
	療育サロンで地域課題が見えてくる，若い親を共に支援するという実践課題共有へ		
2000	「マザーグースの会」とサロンの分離	地域生活支援ネットワークサロン	
2001	小児科クリニック開業		
	地域で発達診療	親子の家，母親支援	交流拠点，ネットワーク，福祉事業

ないことをみんな言わないようになっていく。相手を決して非難しないで話をしていくし，相手を論破しようということでない話し合いの価値は，誰でもが自分の言葉で自分の考えを言うことができるようになっていくこと，そして自分が徐々に広い視野に立って，異なる意見や考え方を取り入れたりしていくこともできるようになっていくと思う。相互に影響し合うっていうか，実践してみて思うのは，誰も何も言わないのに自分を素直に見つめ直すことができるようになるってことだと思う」[27]。

例会の意義については，Bさんも同様の見解を語っている。「誰かが話題提供すると，次の誰かが自分の体験と意見をいうという形で，どんどん違う意見や見方が出てくることがあった。みんなが自分の言葉で自分の問題として語り始めると，とても深い話し合いになっていることがあった。自分の言葉で実感を伴った話をしないと恥ずかしいと感じるほどだった(略)。深い議論になっていく思考のプロセスにみんなが夢中になっていた。話しているうちに自分の問題点が整理されてゆく。本人に元々そういう力があって，話すことによって本人が見つけていくっていう感じだと思う」[28]。

例会の意義に関しては，本音で自己体験を語り合うことから，根本的な共通問題を発見していく機会となること，他者意見のモニタリングやモデリングが起こること，それによって自己省察が深まっていくこと，そして結果的に自己決定のための選択肢が増えていくといった過程共通性が浮かび上がってくる。だが，自己省察の内実は個々人によって差異がある。

Aさんは，二女の療育経験から抽象的な専門知識に基づく過去の実践を反省する中で，実感に基づく療育観を形成していく。次いで「マザーグースの会」の障害児の母親仲間との出会いによって，当事者性をもつ医者として，日常生活で実践可能な子育て支援のあり方に具体的に取り組んでいく。そして，現在は開業医となって発達診療が入り口となった地域療育システムの総合化に向けて，当事者，医療・福祉・教育専門職の連携，協働のための研究会や地域ネットワークづくりに取り組んでいる。

Bさんは，自身の療育機関での体験から否定的障害者観に立つリハビリに疑問を感じ，時に専門家と対立もしていた過去の自分を，「マザーグースの会」の通信で振り返っていく。療育方法を指導され，頑張る母を強いられていた日々，それに応えられない自分を責める気持ちの悪循環に悩んでいたが，「マザーグースの会」の例会で仲間と語り合うことで，母親の気持ちが楽になることの効果を実感していく。母親役割の重圧と葛藤していた自分を振り返り，母親を追いつめるような支援のあり方を変えていきたいという思いを持つ。Aさんが発する斬新なメッセージの媒介者となって，若い母親の気持ちを受け止めて話を聴くという支援のあり方の模索が，自分の実践課題となっていく。

Cさんは，「マザーグースの会」で出会った障害児の子育てに苦悩する母親たちの声は，障害者差別の反映された姿であると客観的に理解していた。自身の体験からも不幸な「障害児の母親」イメージには違和感を感じていた。障害児と生活することは苦労や不便は多いものの，自分の価値観を広

げ，人間性を豊かにすることであると実感してきたからだ。同じ人間として当然の人権を剥奪されている現実を変えていくこと，そのために障害者が当たり前に暮らす地域づくりを目指して，地域生活支援事業を立ち上げていくことがCさんの実践課題となっていく。

Aさん，Bさん，Cさんそれぞれが，目の前にある課題に真摯に取り組んで，集合的行為を促進する役割を果たすような実践参加をしてきたことが結果的に，「マザーグースの会」の組織展開過程を創り上げてきたのだといえよう。それは那須壽のいう「動きつつある組織」，つまり「特定の組織目標をとりあえずは欠いたままで，人々が何がしかの「動機」に突き動かされながら自発的に結集し，そうした人々の間で相互行為を媒介にしながらなにがしかの認識が共有され，そこから「組織目標」が彫琢されていくという組織化プロセス」[29]として，理解するのがふさわしい展開である。筆者は，この展開を支えた自己の学習プロセスや他者を巻き込む際の「教育的プロセス」の形成を，傍流としてではなく運動論の重要な契機として，分析対象に据えることが必要であると考えている。

2．実践内在的な学習の分析

前章では，活動中心者たちの実践に関わる課題意識の変容を辿ってきた。ここでは「マザーグースの会」における学習と「療育サロン」の学習の性格づけを行う。

（1）「マザーグースの会」の学習

まず，「マザーグースの会」の重要な成果は，自助活動から社会的に行動する主体が輩出されたことである。いかなる特質が人材輩出の条件になっていたのか，以下の三点が指摘できるものと考えている。

(1) **共感的な関わりと心理的エンパワーメント**：「マザーグースの会」の展開を促進していく上で重要だったのは，個人的経験と生活課題を共有するための話し合いの場となった月例会であった。それは，基本的に自分の困難な子育ての事実を持ち寄っては，相互に聴きあうというものであった。決してお互いのまずさを批判することはしない共感的な場は，本人自身が他者の子育て実践との共通性や違いに気づき，まずさを素直に反省したり，違うやり方を発見したりするきっかけを提供していくことにつながっていた。つまり同様の課題を抱える人同士の相互作用が，省察の機会を提供していったこと，誰にいわれるのでもなく深く自分を見つめ直すきっかけを創りだしていたということである。結果的にこのような自己省察の中から親自身が「自分らしさ」と，心理的な強さを回復していくきっかけを得ていったことで，心理的エンパワーメントを促す機能を果たしていたのである。

(2) **当事者視点に立つ支援者の役割**：特に療育の初期の段階で親の障害受容を促すために専門家の果たす役割は大きい。「マザーグースの会」は子どもの障害や発達に関わる専門的な知識や関わり方のコツを，平易な言葉で日常生活に即して語ってくれる専門家（代表のAさん）を内部に抱えていたこと，自己の障害児の子育て経験から助言や励ましをくれる先輩ママたちがいたことで，専門的

対応と日常生活における問題対処法のどちらにも応えうる条件があった。

(3)　共通課題を社会問題化する視点をもっていたこと：個々人の子育て困難は決して個人的な対応だけで解決されるものではなく，地域社会生活を意識する時に明らかに社会の側の問題へと転回していくことになる。療育時期には自分の力量を研鑽することで対処できることが，家族以外の人との関わりが増える就学時期や青年期に至って，学校との関係調整，放課後や長期休暇中の地域生活をいかに送るか，それを支える福祉制度や社会的資源の問題という課題が顕在化してくることになる。このような共通する課題に対しては，通信をつうじて他の先進地域の実例を紹介し，福祉施設とはどのようなところかなどの情報を提供し，社会的行動の必要性を伝える等の対応がなされてきた。

（2）「療育サロン」の学習会～地域におけるビジョン共有

「マザーグースの会」の例会とは別に行われた「療育サロン」独自の月例会の内容をみていくと，その目的は他の障害児の親たち及び団体，行政関係者との情報交換および施設資源や福祉に関する学習，ネットワークづくりにあった。「マザーグースの会」の例会との違いは，あらかじめテーマを設定して，それに即した話題提供者がいる点である。障害種別を超えて，同様の課題を抱える人たちに共通する思いや必要を明らかにして，これから自分たちの地域社会がどうあってほしいのか，住みよい地域づくりをいかに行うかを話し合う活動であった。例会内容を整理すると表3のようになる。

内容から見ていくと1，2回目には，市内の在宅支援サービスの現状と利用実態，作業所開設の経緯などを把握する内容となっている。4回目，5回目には高等養護学校と送迎問題，6，7回目では将来の子どもの生活を見据えて，一時預かりや送迎サービスなど地域生活を維持する上で不可欠な資源が不足していること，また実際に使ったことのない人が多いことが明らかにされている。7回の学習会で話し合われた事柄を整理していくと，結果的に，グループホームや青年のディサービスと学童保育サービスという地域生活のために不可欠の資源が，現状では不十分であることが明らかとなった。「療育サロン」の学習会は，支援サービスの実情把握，共通する問題を明らかしていくことで将来の地域生活のイメージづくりを行うことになった。そして，この共有されたビジョンが「ネットワークサロン」の活動目標へと引き継がれていったのである。

この学習会の性格について，Cさんは次のように総括している。「サロンの例会は福祉の話しが多くなりました。自分自身がHさんから制度のこと，社会福祉基礎構造改革のことなどを急速に学んで，よく理解できるようになってきた頃でした。自分がそうだからきっと他の人もそうだろうと思ったのです。そこでHさんが講師役となって福祉改革の話をしてもらいました。どう説明したら親によく理解されるのだろうかと考えて，二人で伝え方を工夫しました」。親たち（自分も含めて）は乳幼児期を過ごしてきて，療育については経験的に理解していたが，福祉制度や国の政策については学ぶ機会はないのが一般的である。「自分が知っていく過程を経験したことで，親が知っていくこと

表3　療育サロンの学習会内容

回	年月日	例会内容（テーマ）	総括（わかったこと）	参加者数（内訳）
1	1999.9.14	自己紹介，在宅支援サービスに求めること 釧路市の在宅支援サービスの現状の説明と意見交換（市のケースワーカーの話を聞いて）		16名（当事者の親14，市職員1，新聞記者1）
2	1999.10.12	療育システムへの希望→障害の正確な告知の必要性と障害児に対するフォロー体制の整備の必要。 「M」の学習会とケアヘルパー利用の実態報告。 共同作業所「S」の歩み，ケアヘルパー制度創設経緯とヘルパー増員のための協力依頼など。	親のニーズや願いを明らかにすることが重要。 先駆者の話を聞き，共に話し合う機会は必要と実感した。困ったときに子どものことを一緒に考えられる第三者がいると助かる。親が思いを口に出し，伝え続けることによって必ず協力者が現れる。	17名（当事者の親14，市職員1，保健師2）
3	1999.11.9	テーマ設定なし，茶話会	どんなことができるようになるとか，どんな職業につくとか，そういう表面的なことが大事なのではなく，いかに生きていけるかを大事にしたい。それはどんな障害をもっていても同じく大切だし，障害がなくても同じだ。	4名（当事者および親）
4	1999.12.14	高等養護学校の学校生活について。 最近釧路市で開催された在宅支援に関する講演会，学習会に参加して考えたこと。 自分たちにできることから始めてみよう→ケアヘルパーではまかないきれないニーズに対するサービスを自分たちで創ってみてはどうか。 遠隔地にある高等養護学校へのバス付き添いボランティアの可能性について。 養護学校における同好会活動について。	高等養護学校については行ってみないとわからないことが多い。在宅支援サービスもわからないことが多い。子どもが小さい頃は具体的に困ったことがないので，在宅支援の必要性を感じないが将来を考えると大切かもしれない。それぞれのニーズにあうものを考えてできることからやってみると，それぞれが小さな動きでも全体として住みやすい地域になっていくのではないか。いろいろな話を聞いたり，いろいろな立場の人と話をすると必要なものが何かわかってくるし，いいアイディアも出てくる。	9人（当事者の親8，市職員1）
5	2000.1.25	ピアカウンセリング講座→内容はよかったが参加者が少なかった。 養護学校での先生との関係づくりについて。 寄宿舎に入れることについて。		6人（当事者の親5，市職員1）
6	2000.2.8	学校の先生との関係づくりについて。 将来の施設入所について。 将来の余暇活動について。 一時預かりや送迎サービスについて。 サロンの4月からの計画について。		10人（当事者の親9，高齢者介護の会の代表1）
7	2000.3.14	在宅支援サービスについて→実際使ったことがない人が多い。特に短期入所の制度は使いにくい。 学校卒業後の作業所や通所の施設も既存のものでは数も足りないし，内容的にも物足りない。	障害が違うと悩みや必要なサービスは違うけれど，親としての願いや思いは同じ。 サービスがよくわからない，使いにくい，預けることに抵抗がある。わかりやすいサービスへ→親は実際使いながら，ニーズを表面化する必要がある。 市などの行政とも協力してより良いサービスを実現しなくては。	10人（当事者の親9，知的障害者地域援助センターの職員1）

は大切なことだと感じていました。知識をもつことで視野が広がって，選択肢が増えるのだと思って続けてみたら，これまでは感覚的だったものが知識的にも共有できることが増えていったと感じました」[30]。このようなCさんの思いとHさんの伝える努力は，ある程度の成果を収めたといって良い。現「マザーグースの会」の事務局担当者Eさんは，その影響を次のように語っている。

当時子どもが養護学校に就学して，一人の時間ができたことで例会に毎回のように参加していたEさんは，「Cさんから施設って知ってる？入れたい？と聞かれて，全く知らないことに気づかされました。新しいことを学ぶのはすごく面白かったというのを覚えています。目の前のことで精一杯だった自分から少しずつ社会に目を向けることができるようになったのと，他の障害のことについて，例えば，自閉症とか知ることができたのも例会に参加してからだったんです」と語っている[31]。「療育サロン」への参加を通じて，Eさんは「マザーグースの会」の運営に関わっていくようになった。

4章　市民活動の課題～学習と実践参加のあり方をめぐって

「マザーグースの会」は自助活動でありながら，やがて別の課題意識をもつCさんの参加を得て，地域活動へと展開していった後に，別の組織へと分離する経過を辿った。前者は従前からの母親同士のサークル的組織として，後者はNPO法人となって地域生活支援事業を立ち上げていく。中心的活動者がほぼ抜けることになった「マザーグースの会」の活動は，別の事務局担当者を得て現在も継続中である。2000年3月末，「療育サロン」の助成が終了する際に，三人が出した結論は「分離して別の事業体を立ち上げる」ことだった。　実質的中心者であったCさんが仕事として地域福祉資源をつくる覚悟を決めたからであった。「療育サロンにいろいろな人が集い，問題点が整理されてきた頃だったので，やめるのはおしいと思ったことが大きかったのです。でも，マザーグースの会では事業組織には向かない，どうしようと考えて独立を決めました」[32]。

Aさんはこの過程を次のように考えて，通信の巻頭言や雑誌記事に書いている。「…私たちがしなければならないことは，社会と戦うことではなく，少しずつ社会を変えていく原動力になることです。「マザーグースの会」はそのために，みんなで一緒に何かをするというより，そこでそれぞれが自分の思いを実現するための，つまり自分自身で歩き始めた一人一人を応援するための母艦のようなものではないかと，最近私は思っています」。Cさん，Bさんがいわば卒業していくのだという理解である。このような認識は，当事者間に不必要な論争を起こさせることのないように配慮された対応であったと考えられる。なぜなら，上述の「自己実現」は頻繁に語られるなじみのメッセージだったからである。「自分らしく生きる」ことというコードは，広く会員に共有された価値であり，当然沸き起こりそうな批判や反発を回避することに一役買ったといえよう[33]。

2000年4月から新事務局体制となって活動を開始することができたのは，新たな実践参加者がい

たからである。一人は1994年にCさんと同時期に入会したDさん，もう一人は「療育サロン」の学習会に参加していたEさんである。Eさんは「療育サロン」以前に「マザーグースの会」との接点はなかったものの，Dさんとは旧知の仲であったことから二人事務局体制が始まった。現在でも，活動内容はほぼ変わることはないが，月例会は発足当時の盛況ぶりを取り戻すことはない。Aさんの発達相談外来ができたことや，インターネット情報などで，若い親たちは情報を以前よりは得やすくなっているからである。現在では，むしろインターネットを介して全道，全国の悩める母親から共感の声が寄せられているとのことである[34]。一方，発足当時から参加していた会員たちの中からは，他のグループを立ち上げて地域活動を実践する人，作業所やグループホームの世話人として働く人がでてきている。

一般的に，中心軸を失った市民活動や運動は求心力を弱めていくと言われている。「マザーグースの会」のように，次なる中心的活動者を確保できる例は多くはないだろう。現在の「マザーグースの会」をどう見るか。筆者は，新たな課題意識をもつ人たちによる新たな展開のステージにあると考えている。同じことを繰り返していく実践ではなく，新たな課題に応える実践共同体としての「マザーグースの会」の今後のあり方は，新規参入者たちの意識に働きかける気づきと共感の学習の場を，いかに創り上げるかにかかっているのではないだろうか。真剣な議論や人間的関わりの中にあって，十全に参加してきた人たちの中から，自己を社会的に活用していく意欲を持つ新たな実践者が育っていくのだということは，レイブらの「正統的周辺参加」論としてある程度理論化されてきている[35]。本事例の考察からも，実践参加者間の相互的学習の質が実践のあり方を左右し，社会的なものへと拓いていくのか，そうでないのかに影響を与えていくと思われる。このことからも，実践に内在する学習過程を研究するには，学習内容や過程，機能の分析だけでは不十分で，そこに働く中心者たちがモデルとして新たな参入者たちに生き方を示し，実践共同体をいかに協働し，創り上げているかという視点が不可欠であると思われる。「マザーグースの会」の展開は，まさにこのような「周辺的参加」から「完全な参加」を遂げてきた人々による，「人間関係構造の変化」と「実践構造の変化」として捉えられるものである[36]。

本論では，異なる課題意識が出合うことによって学びが生まれ，新しい成果をつむぎ出していくような実践共同体を，内在する学習活動の評価と実践構造の変化から描いてきた。独立した「ネットワークサロン」は現在，約40名の職員を抱える事業体に成長している。ここにおいて十全たる実践参加がいかに実現していくのかを考察していくことは，実証的かつ理論的にも課題として残されている。サービス提供者と利用者に分離した関係，あるいは市民活動としてのNPOの意義やミッションが職員にどのように共有されていくのか，といった課題を考えていくために，「正統的周辺参加」論を参照していくことは可能であろうか。今後の検討課題としていく。

＜注記＞

1）津田英二(2001：139－147)「NPOにおける参加型学習の展開」『NPOと参画型社会の学び－21世紀の社会教育』エイデル研究所

2）花立都世司，森実(1997)「ワークショップーネットワーキング時代の学習論」『日本の社会教育第41集ボランティア・ネットワーキングー生涯学習と市民社会』東洋館出版社

3）石川准(1991) 介助ボランティアとの対等な関係のつくり方等自立生活準備のためのピアカウンセリングとは，①先輩当事者が新規参入者の「準拠者」ないしは「行動モデル」として日常生活の実際を示すプログラムで，①日常生活の経験から得られた生活技術や情報を新人たちに伝えること，②情緒的心理的サポートから成る。「自助グループ運動から他者を巻き込む運動へーある障害者グループの活動からー」『社会運動論の統合を目指してー理論と分析ー』成文堂

4）岡幸江(1999)「介護問題における生活環境の組織化と社会教育ー障害者自立生活運動の当事者性が示唆するもの」『高齢社会における社会教育の課題　日本の社会教育第43集』

5）石川准，前掲論文

6）拙稿（2002)「障害児の親たちによるセルフ・ヘルプ活動の展開と意義ーマザーグースの会の分析」『北海道地域福祉研究』第6巻，「マザーグースの会」の展開過程，学習内容，構造の分析を行っている。「マザーグースの会」会員への調査は2002月8月から2003年3月までの期間で現地を6回訪問して行った。14名の会員，中心的活動者たちに個別面接と集団面接の方法で実施した。

7）このように述べるとあたかも親の関わり方次第で自閉症に伴う独特の情緒的，行動的特性が軽減されるかのような印象を与えかねない。Aさんの二女は現在でいう高機能自閉症であったことに留意されたい。

8）　2002年2月堀口氏への聞き取り調査による。

9）堀口貞子『寄稿集　みんな子どもが教えてくれた』マザーグースの会編

10）拙稿（2002)，前掲論文で「マザーグースの会」の学習活動の意義と構造を分析しているので参照されたい。

11）2002年8月堀口氏への聞き取り調査による。

12）2003年5月堀口氏への聞き取り調査による。

13）堀口，前掲エッセイ集より引用p57。

14）2003年6月堀口，日置氏への聞き取り調査による。

15）マザーグース便り No.43，1999年12月発行。

16）マザーグース便り No.44，2000年2月発行。

17）堀口，前掲エッセイ集より引用。

18）2003年5月瀧氏への聞き取り調査による。

19）徳川直人(2002)『北海道釧路市における「マザーグースの会」の形成と展開：「障害児の母親物語」の集合的形成と変容・相互行為論的視点からの報告』徳川も独自のアプローチで「マザーグースの会」発起人たちの意識分析を展開している。本論の考察を行うにあたって先行する分析として参考にさせていただいた。

20）2003年8月日置氏への聞き取り調査による。

21）日置真世(2000)「情報源「ごきげん子育て」と情報基地「ネットワークサロン」～支え合う地域づくりをめざして～」『北海道保育白書2000』
日置真世（2000)「親が元気なら，子どもも元気」『NODE』7・8月号

22）2003年8月日置氏への聞き取り調査による。

23）2003年8月日置氏への聞き取り調査による。

24) 2003年8月日置氏への聞き取り調査による。
25) 2003年8月日置氏への聞き取り調査による。
26) 拙稿（2002），前掲論文で会員調査の分析をしている。
27) 2003年5月堀口氏への聞き取り調査による。
28) 2003年5月瀧氏への聞き取り調査による。
29) 那須壽（1991：149－175）「社会運動組織の新たな概念化をめざして－「現実構成パラダイム」構築の試み－」『社会運動論の統合をめざして－理論と分析－』成文堂
30) 2003年8月日置氏への聞き取り調査による。
31) 2002年9月E氏への聞き取り調査による。
32) 2003年6月堀口氏と日置氏への聞き取り調査。2003年8月日置氏への聞き取り調査による。
33) 堀口，前掲エッセイ集より引用p53
34) 2003年6月堀口氏への聞き取り調査による。
35) ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウェンガー（1998）『状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加』産業図書
36) 高木光太郎(1993：265－273)「「状況論的アプローチ」における学習概念の検討～正統的周辺参加(legitimate peripheral participation) 概念を中心として～」東京大学教育学部紀要，32